トーマス・ベルンハルトの『訂正』について
−円錐体考察を中心に−

熊　沢　秀　哉

Über Thomas Bernhards "Korrektur"
-Unter dem Gesichtpunkt des Kegelbegriffs-

Hideya KUMAZAWA

岐阜聖徳学園大学
紀要第54集
2015年2月

トーマス・ベルンハルトの『訂正』について
－円錐体考察を中心に－

熊　沢　秀　哉

Über Thomas Bernhards "Korrektur"
-Unter dem Gesichtpunkt des Kegelbegriffs-

Hideya Kumazawa

Schlüsselwörter:　Thomas Bernhard, "Korrektur", Kegel

In dieser Abhandlung wird Thomas Bernhards "Korrektur" unter dem Aspekt von Kegel diskutiert.Die Hauptfigur in "Korrektur", Roithamer, baut den Kegel für seine Schwester in der Mitte des Kobernaußerwaldes. Dieser Kegel stellt das sehr komplexe Bild in "Korrektur" dar. In dieser Abhandlung wird dieser Kegel mit den Zusammenhägen von Roithamers Schwester und seinem Freund, Höller, analysiert.

Ⅰ. はじめに

オーストリアの作家、トーマス・ベルンハルト（1931-1989）の長編小説『訂正』（1975）は、ベルンハルト四作目の長編小説である。1963 年に発表された長編小説『寒気』で文壇に認められてから『訂正』の発表までに、ベルンハルトは、短編小説四作品、戯曲を四作品発表しており、オーストリアのみならず、ドイツ語圏の作家としてすでに確固たる地位を築いていた。

ベルンハルトが作品を発表する頻度は、彼の作品史全体を通しては、決して低いとは言えず、特にいわゆる自伝的五部作 (1) の後は、長編小説だけを見ても、『コンクリート』（1982）、『破滅者』（1983）、『伐採』（1984）、『古典絵画の巨匠たち』（1985）、『消去』（1986）とほぼ一年ごとに発表している。その他に短編や、戯曲も含まれることを考慮すれば、純文学の作家としては多作の部類に入ると言えるだろう。しかし『訂正』は、その前作となる長編小説『石灰工場』（1970）から五年の間隔を空けて発表されている。この期間中ベルンハルトは短編小説一作品、戯曲を二作品発表しており、『訂正』の執筆のみに従事していたわけではない。しかし、作品のプラン自体は既に 1970 年の時点で持っており (2)、約五年という成立期間は、ベルンハルトの作品としては異例の長さとなっている。

Suhrkamp 社から出版されているベルンハルトの『全集 Ⅳ』の解説によれば (3)、「訂正」というタイトルそのものは既に 1972 年の時点で出版人に告げられており、その後も不変であったようだ。しかし、成立期間の長さから見て、このタイトルが暗示するように、テクスト自体は訂正に訂正を重ねられて完成されたと推測しうる。結果として『訂正』は、ベルンハルトの作品中で最も複雑な構成を持ち、かつ非常に複合した形象と記号の連関関係を有する作品となっている。

本稿は、この『訂正』を取り上げ、この作品に設定しうる数多くの問題点の中から、主人公の Roithamer が妹のための住居として建設する「円錐体」を中心に論ずるものである。

オーストリア出身の哲学者、Ludwig Wittgenstein と多くの共通点を持つ『訂正』の主人公

Roithamer は[(4)]、Wittgenstein 同様極めて裕福な家系の出身であり、故郷の Altensam を半ば捨て去るような形でケンブリッジに赴き、そこで教鞭をとりながら研究生活を送る自然科学者である。自ら望んだわけではないが、Altensam の巨額の遺産を相続することになった Roithamer は、それを使って家族内で唯一彼が愛情を傾ける妹に、彼女の住居として円錐体を建築する。建築場所は、広大な Kobernaußer の森の中心点であるとされる。六年の歳月と巨費を掛けて円錐体は完成し、妹に披露されるが、円錐体を見た妹は驚愕し、死の病に取り付かれ、それから一年も経たないうちに死亡する。取り残された Roithamer も妹の死後間もなく Altensam で自殺する。

ベルンハルトの長編小説は筋らしい筋を持たず、作品中に現われる出来事の時系列も細かい部分では錯綜していることが多い。『訂正』もその例に漏れないが、おおよその内容は以上のようなものだ。この概略にも示されているように、作品内容の最大のポイントは、主人公の建築する円錐体とそれに起因するとされる妹の死、そして Roithamer の自殺だろう。主人公は、ベルンハルト作品の主人公のほぼ全てに共通するように、故郷と故国に対する憎しみを抱き、それを行動原理としている。Roithamer は、最終的には Altensam の全てを売却する意志を持っており、Altensam に Roithamer の兄と弟と共に住んでいた妹のために、新しい住居を建築すること自体は異常な事ではない。しかしそれが高さ数十メートルにも及ぶ、四階建ての内部構造を持つ円錐体であるのは何故なのか。またその場所が、Altensam と同じ上部オーストリアにあるとはいえ、40km × 70kmもの広さを持つとされる Kobernaußer の森、しかもその正確な中心部であるのは何故なのか。

ベルンハルトの長編小説の主人公たちはいわゆる精神的人間であり、芸術家、自然科学者として、自らの作品あるいは研究のイデーを持ちながら、それをまとめることに失敗する者たちだ。その中で『訂正』の Roithamer は、唯一、これはおそらく彼が半分は Wittgenstein をモデルとする真の天才であるという設定を理由とするのだろうが、自らのイデーを実現するかに見える。それが円錐体なのだ。そして完成されたイデーとしての円錐体は、ベルンハルト研究においては、その象徴性、記号性について様々に解釈されてきた。

Anne Thill は、その研究の中で、『訂正』に関する従来研究をまとめ、円錐体の解釈の例として「世界の中心」、妹に対する近親相姦的な「性的象徴」、あるいは「Roithamer の自己表現としての円錐体」などを挙げ、自身の解釈としてこの三番目に近い「自己実現としての円錐体」を提出している[(5)]。これらの解釈はいずれも円錐体の性質の一面を捉えてはいる。円錐体の建築された場所は、上述のように、Kobernaußer の森の中心部であり、それが妹の幸福のためであることは Roithamer によって繰り返し強調される。また円錐体の完成と、それに向けての超人的な努力の期間が、Roithamer の人生の頂点を形成していたことは、Roithamer の友人である語り手と Roithamer 本人によっても認識されている。これを彼の「自己実現」と解釈することは可能だろう。しかし、『訂正』のテクスト全体から見た場合、これらの解釈のどれについても、その一つのみに完全に同意するには抵抗感が残る。『訂正』における円錐体とは一体何なのか、再度問い直してみたい。

Ⅱ. Höller、Höller の家とその屋根裏部屋および Roithamer の妹と円錐体の関係性

1.Höller の家とその屋根裏部屋

あらゆる人間との関係を徹底的に絶ち、一人山間のみすぼらしい宿屋に引きこもる『寒気』の主人公 Strauch とは異なって、『訂正』には、主人公の Roithamer と親しい関係にある数名の人物が登場する。すなわち、彼の妹、そしてテクスト内では名前が明かされることはない語り手、さらに Altensam 近くで動物標本制作を生業とする Höller である。Roithamer と Höller と語り手は、同じ小学校の同級生であり、それぞれの出身家庭の階級的差異を越えて生涯続く友情を育んでいる。村の医師の家に生まれた語り手は、いわば Roithamer の影のような存在であり、Roithamer 同様故郷を出てイングランドに渡り、ケンブリッジで自然科学研究者として生活している。一方 Höller は家業を継ぎ、故郷に残って自分の家族を持っている。

『訂正』のテクスト内で特に重要な機能を果たしているのは、Höller の家とその屋根裏部屋である。テクストの冒頭部は、Roithamer の死後、重い肺炎に罹って生死の境をさまよった語り手が、療養と、Roithamer の遺言で自らに託された彼の遺稿の整理を兼ねた目的で Höller の屋根裏部屋に入る場面で始まる。この屋根裏部屋は、円錐体の設計と建築の期間中 Roithamer の主要な滞在場所となり、円錐体を巡るイデーの展開にとって必要不可欠な空間であるとされる。また、Höller の家は単にこの屋根裏部屋を擁する場というだけでなく、円錐体のモデルとなった建築物であるとされるのである。

1.1.Höller の家

『訂正』は大きく分けると二部構成になっており、それぞれタイトルが付けられている。第一部のタイトルは、「Höller の屋根裏部屋」であり、Roithamer の死後、屋根裏部屋に入った語り手の視点から見た記述、あるいは語りの形式となっている。第二部のタイトルは「検討と整理」であり、語り手に託された Roithamer の遺稿を元にしたテクストである。第一部のタイトルが示すように、Höller の屋根裏部屋はテクストの冒頭部から前面に出され、Roithamer と円錐体建築にとっての重要性、並びに遺稿の整理に取り組む語り手に与える影響の大きさが幾度となく強調される。一方で Höller の家そのものについても、屋根裏部屋に対する言及ほどの頻度ではないが、テクスト内で複数回にわたって記述される。以下にその主な部分を取り上げながら、円錐体との関係を分析していこう。

まず、『全集 Ⅳ』の 87 頁以降の箇所では、語り手の想起として、語り手が子供の頃、父に連れられて Höller の古い家によく行ったこと、その家は、谷を流れる Aurach 川の下流にあったこと、その家を Höller が自分の代になってから突然売り、その売却代金に、かなりの額の銀行からの借金を足して新しく自分の家を建てたことが語られる。さらに、古い家の売却条件として、新しい家が建つまでの「二年間、新しい所有者が家に入居しているにもかかわらず、(...)、家族と共に元の家に住めること」(87) とするのである。「この出来事全体が、Roithamer にとって彼の円錐体建築の手本となった。Roithamer は、全く無意識のうちに、Höller による、Höller の家の計画と施工、完成の出来事を、自分の円錐体の計画と完成の範としたのだ」(87)。Höller の生家がどのような構造の家屋であったのかの記述はないが、剥製標本制作が代々の家業であり、Höller もそれを継いだことを考えれば、標本制作の仕事をする上で新しい家が必要不可欠だったとは思えない。さらに、新しい家屋が完成するまでの二年間を古い家で、買い手と同居することに

よって生じる不都合や不便を考えれば、自身の家族のために広い居住スペースが必要だというような生活上の快適さを求めて、Höller が新しい家を建てたのではないことが推測可能だ。Höller は、外的な理由や必要性に迫られてではなく、突如として自らの家を建てることを決意し、銀行からの借り入れというリスクを負いながらそれを実行したのである。

Roithamer が円錐体の建築にあたって、設計に三年間、施工に三年間の計六年間を費やしたことは、テクストの冒頭部でも言及され（12）、87 頁でも再度言及される。一方で Höller は自分の家の設計、施工に計四年間を費やしたとされる。「Höller は、彼の置かれた状況下で、Höller の家の計画、施工、完成までに四年を必要とした」（87）。

実はテクストのこの部分は、円錐体と Höller の家の関係という内容の問題とは別種のものになるが、『訂正』のテクストのある特徴を示している。それは、この引用部の「四年」という部分と、上記引用部の、「二年間」の設計、施工期間中元の家に居住するとされている箇所が矛盾するということだ。この種の矛盾や記述のズレは『訂正』のテクストには非常に多数存在する。テクストの展開上大きな比重を占めるであろう例をいくつか挙げてみよう。例えば、上述したように、円錐体の建築費を Roithamer は、Altensam の遺産相続で賄っているとされる。しかしそのための要件であるはずの、彼の父親と母親がいつ死んだのかがはっきりしない。テクストが展開するに従って、円錐体の建築が始まってからの期間においても父親、母親ともに存命でなければ筋が通らない場面も出てくる。あるいは、Altensam を出た Roithamer が、両親が死ぬまでの最後の 12 年間は、両親とほとんど会わなかったと記述される部分もあれば、彼がケンブリッジに行った後でもほぼ数ヶ月おきに帰省し、母親との諍いを繰り返したと述べられる部分もある。これらは、テクストを一読すればどの読者にも感得される矛盾であり、『訂正』が発表された直後は、批評家等からも、ベルンハルト、もしくは出版社の編集者のいい加減さを起因とするミスではないかと指摘されたりもした。しかし、いわゆる「物語の破壊」を自らのテクストの特徴として掲げるベルンハルトの姿勢を鑑みれば、これらの矛盾も、極限られた、単語レベルの校正上の誤りを除けば、ベルンハルトの意図として解釈することが妥当だろう。ベルンハルトの物語批判は、特にテクスト内の出来事を、客観的な時系列通りに並べることに対する嫌悪に発しているようだ。上記のように、『訂正』のテクストでは、ある出来事、すなわち、円錐体の設計、建築期間、あるいは Höller の家の設計、建築期間などの「時間」が重要な記号性を持っている。この期間は、その性質上客観的な時系列に結びつき易い。ベルンハルトは確信的に、このような時系列が、テクスト内の出来事に結びつけられることを避けているのだ。しかしこのような行為は、単に時系列の曖昧化のみを結果として引き起こすだけではなく、出来事の因果関係も不明にしてしまう。すなわち上記のような、テクストの内容的な矛盾も伴うということだ。従って、『訂正』のテクストを受容するには、論理的な矛盾にある程度目をつぶり、テクストを「束」として捉えることが必要となるだろう。それは、ある一つの神話的出来事に対して、口承された複数のテクストが束として存在する、テクストとしての神話のあり方と比すことが可能かもしれない。肝要なのは、テクスト内における個々の矛盾をあげつらうことでも、それらの矛盾を解決するような論理的整合性を再構成することでもなく、テクストを全体として捉える姿勢だろう。

Höller の家が、Roithamer を魅了した理由は、その計画の大胆さと、建築の専門家ではない Höller が長時間を掛けて設計、施工を独力で行ったことだけに止まらない。Höller はその家を、原語で Aurachengstelle と表記される場所に建てた。この単語はテクストでは固有名詞のように扱われるが、本来の固有名詞は川の名称である Aurach の部分のみであり、残りの Engstelle は、

川幅の狭く（eng）なった場所（Stelle）という意味だ。テクスト内でこの川は、過去に何度も氾濫し、その都度川沿いに建てられた家屋ごと住人を飲み込み命を奪ってきたと記述される。テクスト内において、Roithamer の住む Altensam や、語り手の実家のある Stocket の村、そして Höller の家のある Aurach 川沿いの谷の位置関係や地勢図が俯瞰的に描かれることはないが、川沿いの地形が谷であること、それ故住人たちは氾濫の危険があるにもかかわらず、常に川沿いに家を建て続け、洪水の度に被害を受けていることは記述されている。Höller はこのような川沿いの地形の中で、川幅が狭くなり川の流れの速度の速まる場所、しかも川のすぐ近くの土地、すなわち見た目には川沿いの土地の中でも最も危険な場所にある土地を購入し家を建てるのである。彼のこの行為は近隣の住人たちの嘲笑の的となるが、Höller 自身は川の危険性を認識し、独自の観察と計算によって、敢えて Aurachengstelle に家を建てたとされる。そして Höller の家が建築されて以降も、川は何度も氾濫し住人たちの命を奪ったが、彼の家は被害を受けなかったことが記述される。

Aurach 川沿いの谷の住人たちは、おそらく何百年間も川の氾濫の危険にさらされてきた。氾濫の危険から遠ざかるためにまず第一に考えられることは、川から離れることだ。それは理性的な判断というよりも動物的な反応といえるだろう。しかし急峻な山の斜面に囲まれた谷では、住居を建てることの可能な土地の面積には限りがある。先祖伝来の居住地である谷を完全に離れる勇気も、また、おそらくそのための経済的基盤も持たない住人たちは、他に選択の余地なく川沿いに家を建て続け、洪水の度に流され続けたのだ。Höller は、この自然に翻弄され続ける谷の住人たちの状況に、自らの観察と計算に基づいて突破口を開くのである。自らの頭で考えることをしない谷の住人たちは、この Höller の行為を理解せず嘲笑する。しかし真に嘲笑されるべきは、自らの頭で考えることなく、動物的反応を繰り返して自然に命を奪われ続ける住人たちの方なのだ。Roithamer を魅了したのは Höller のこの姿勢に他ならない。

Aurachengstelle に家を建てるという、Höller の家の建築場所に関する Höller の姿勢をさらに抽象化すると、二つの要素を取り出すことが出来る。一つは、村人たちが共有する既成概念にとらわれず自らの目で観察し、思考し、判断するということ。これはそのまま反伝統的姿勢につながる。もう一つが、その思考と判断を武器に自然の懐に切り込んで自らの存在の基盤を確保するということだ。この二つの要素を Roithamer は、自らの円錐体建築に取り込んでいる。すなわち、住居としての円錐体は、他にその例が見られない程に革新的であり、さらに、Höller の場合とは比較にならない規模の額である Altensam の相続財産を使うという点で反伝統的であり、かつさらにラディカルに伝統破壊的なのである。また、広大な Kobernaußer の森の中心部という円錐体の建築場所は、まさに自然のただ中に他ならない。Höller の家は、確かに Aurach 川との位置関係においては「中心部」ではない。しかしその家は、Aurach 川の流れる音の中心部に建っていることが言及される。Höller の家の建つ場所と Roithamer の円錐体の建つ場所が呼応していることはテクスト内で何度も強調される。その中で象徴的な部分を引用すれば、「何度も繰り返して、彼、Roithamer は、Höller に質問した、なぜ Aurachengstelle なのかと、そしてまた、彼、Höller は、Roithamer に、なぜ Kobernaußer の森の中心部なのかと。この質問に答えられることはなかった」（114）という箇所が挙げられるだろう。

円錐体建築にとって、もう一点、Höller の家が果たした重要な役割として挙げられるものが、Roithamer による Höller の家の内部の観察である。これについてはテクストの第二部、すなわち Roithamer の遺稿からの記述によって構成される部分の「Höller と Höller 的なもの、Höller の

屋根裏部屋についての記述の試み」（241-253）の箇所に集中的に記述されている。それによればRoithamerは、円錐体についてのプランを練るために、Hollerの家を観察する必要性を持った。その観察は、短時間で済むような、家の外部、内部の検分と構造確認という性質のものではなく、Höller自身の観察や、彼の家族の、家の中での生活の観察を含めた長期に渡る計画なのだ。観察期間についてはテクストには明示されていないが、おそらく数日間ではなく、数週間に渡るものだろう。この時初めてRoithamerは、Hollerの屋根裏部屋に滞在することになり、屋根裏部屋の特殊性と、それが自らに与える影響の重要性を認識するのである。

この集中的な観察の結果、RoithamerはHollerの家がHollerと完全に一致していることを見出す。「Hollerに特徴的なものは、Hollerの家に特徴的なものであり、Hollerの内部は、Hollerの家の内部なのだ」（250）。この結論を受けてRoithamerは、自分の建てる円錐体は、彼の妹に完全に一致していなければならず、円錐体の内部も円錐体という外形も、妹に対する観察と研究から生まれたものであると主張するのだ。

しかしここで問題となるのは、ある建築物がある人物に100%一致している、とはどのような状態なのか、ということである。Hollerの家とRoithamerの円錐体に関して上述した点、すなわち、旧世代に対抗しながら、リスクを冒して着工し、自らの頭で思考し、判断した上で、敵対的な自然の懐に飛び込む位置に建築するということに対しては、受容者側として少なくとも具体的なイメージをもつことは可能だ。しかし、ある人間の性格に一致する建築物、ある人間の内面に一致する建築物の内部とはどのようなものなのだろうか。『訂正』のテクスト内では、Hollerの家が具体的にどのような間取り、構造をしているのかが明かされることはない。テクストから判明することは、Hollerの家の内部に、5×4mの広さの屋根裏部屋があること、屋根裏部屋の階下の部屋で食事が取られること、Hollerの生業である剥製製作のための工場が家屋内にあること、Hollerとその妻、子供二人が全員で寝る寝室があることだけだ。従って、Hollerの家のどのような内部構造が、Hollerの内面と一致しているのかについて具体的なイメージを得ることは、テクストからは不可能なのである。

HollerとHollerの家の場合とは異なって、Roithamerの円錐体については、各種の具体的な数字がテクスト内で明かされる。まず内部の部屋数が、最終的には17であること、円錐体の先端部に部屋は一つのみ存在すること、円錐体の内部は四階建ての構造であること、17の部屋の内九つの部屋には窓がないこと。さらに、最上階の下の階、すなわち三階の中央に瞑想室があること、この部屋の中心に赤い点がマークされ、そこが円錐体全体の中心点でもあること、そこから外壁までの距離が14mであること。そしてこの瞑想室の階下に気晴らしのための部屋があること、一番下の階がいわゆる円錐体内部の前室にあたり、部屋数が5つであることだ（194）。円錐体の高さについての記述はない。だが、周囲にある木々の高さと同じであることが言われ、円錐体の中心点である瞑想室の中央から外壁までの距離14mを考慮すれば、円錐体の高さは、およそ28m前後であることが推測可能だ。さらに円錐体の外部も内部も、壁は白漆喰で塗られ、建築素材は、石、鉄、ガラス、そして瓦素材であること、すなわち木材は使われていないこと、自然光が巧みに取り込まれ、空調に関しても、窓を開けることなく各部屋に外気が循環するようになっていると記述される。一見かなり具体的な数字に見えるが、これらの数字だけでは円錐体の間取りを再現することは出来ない。最大の理由は、円錐体の内部で、具体的に位置が明かされている部屋が三階の中央にある瞑想室と最上階にある部屋だけだからだ。間取りに関して他に挙げられているのは、全体の部屋数の17、一階の部屋数の5、外壁に面していない部屋数の9だけであ

り、ここから再構成される間取りはあくまで推測の域を出ない。

今ここで重要な点は、円錐体のデータが、詳細の全く不明な Höller の家よりは明らかなことだ。しかし、上述した、Höller の家と Höller に関して生じるものと同種の疑問は解決しない。すなわち、このような円錐体建築物と、外部においても内部においても完全に一致している人物とはどのような人間なのか、ということだ。

Höller の家と Höller、Roithamer の円錐体と彼の妹に対する記述を比較検討すると、ある興味深い点が見えてくる。『訂正』のテクスト内で、Höller の言葉が直接話法で再現されることはない。第一部は、そのほぼ全てが語り手の言葉であり、第二部は、語り手を通した Roithamer の言葉である。しかし、第一部において語り手は、Höller の家に着き、屋根裏部屋に入り、Höller の家族と食卓を共にし、Roithamer の自殺現場について Höller から報告を受け、工場で作業をする Höller の様子を屋根裏部屋の窓から観察する。第二部においても、Roithamer の遺稿に、Höller にまつわる記述は再三登場する。従って、Höller の性格についての直接的言及が、テクストに見られなくても、Höller の人となりについてのイメージは朧気ながら掴むことが可能だ。一方で Roithamer の妹の場合は、Roithamer 自身にとって彼女の持つ重要性が強調されはするが、テクスト内で彼女について具体的に言及されることはない。第一部において、Höller とその家族との交流の場面が、第二部では、Roithamer の子供時代に、彼が Altensam において妹と過ごした時間が描かれはするが、双方とも極端に牧歌的形象となっており、そこからは、現実感のない人物像しか得られることはない。

テクスト内における Höller の家と Höller、円錐体と妹の関係をまとめると以下のようになる。Höller の場合、その人物像のイメージがある程度掴み得る。それに対し、Höller の家は、その具体的記述がほぼ見られない。Roithamer の円錐体の場合、それが受容者にとって具体的にイメージ可能かどうかは別として、大きさ、部屋数、素材などの数字は挙げられている。他方、妹に対する具体的記述は見られない。すなわち、Höller の家は、Höller に完全に一致すると語られ、（Roithamer によれば）円錐体は、彼の妹に完全に一致する建築物だと主張されはするが、どこがどのように一致するのかという点に関しては、テクスト内で明かされることが巧みに避けられているということだ。これはどのように解釈され得るだろうか。

ある建築物は、その機能性においては 100%の完成度を言うことは可能だ。例えば何かの機械製品を製造する工場を想像すれば分かりやすいだろう。これを Höller の家に当てはめれば、例えば彼の生業である剥製製作に限定して、彼の制作のやり方に完全にマッチした工場というものはあり得るだろう。しかし、ある人物の性格、暮らし、考えなどの人格全体を具体化する建築物は存在し得ない。故に『訂正』のテクストでは、Höller の人格と Höller の家が完全に一致している、円錐体は Roithamer の妹に完全に一致していなければならないと繰り返し主張されながら、その一致の具体性を示すことが巧妙に避けられているのだ。テクスト受容者の視点によっては、ベルンハルトのテクストはこの時点でほぼ無意味な言葉の羅列と化してしまうかもしれない。しかしベルンハルトのテクストにとって重要なのは、具体的イメージを作り出すことではなく、イデーを示すことなのだ。ベルンハルトの文学において、この「イデー」という用語は、単に「理念、観念」という邦訳に、あるいは英語における「アイデア」という単語にも置き換えられるものではなく、純粋な精神活動全体を指すものだ。Höller の家のケースでは、上述してきたように、自分の家をつくることの思いつきの唐突さと冒険性、建築の設計から施工までを自力で行うという自律性、人間の存在を脅かす暴力的な自然に対して、精神活動の象徴である「観察と計算」をもって対抗

する、という点の全てがイデーを形成する要素なのだ。そして Höller の家と Höller の関係性において、Höller 自身の姿勢や行動として取り出すことが出来るのは実はここまでなのである。Höller 自身にはおそらく自分の家と自分が完全に一致しているという認識はない。少なくともテクストにはそうは書かれていない。また Höller が、自分の家を設計する時に、自分という存在と完全に一致する家を念頭においていたという記述もない。そこから先の部分、建築物と人物の一致の部分は、Roithamer の観察結果から生まれたものに他ならない。この段階に至って、イデーは、現実との対応性を失い、テクスト中で何度も繰り返されるように、一種の「狂気」のイデーとなる。しかし Roithamer にとっては、この「狂気」は、イデーが現実性を失ったが故に生じてしまう、というような否定的な方向性を持つものではなく、イデーが現実を乗り越え、純粋性を獲得する証なのだ。

Höller の家は、Höller とその家族の暮らしから生まれる現実的な必要性に迫られて建築を決意されたものではない。さらに建築の専門家でない Höller によって設計、施工され、常識では考えられない場所に建てられたとされる。Höller の家をめぐるこれらの要素は、Roithamer にとって、自らの円錐体建築のモデルになったとテクスト内では記述される。確かに、上記した要素は、それぞれ、円錐体建築において、強められた形で再現されている。しかし、結果として完成された Höller の家と Roithamer の円錐体では、その外見が示すように [(6)]、同一の範疇にあるものとは思われないほどの差異が示されている。テクスト内では、この差異が生じた原因が、さりげないエピソードの形で示される。すなわち、Roithamer の円錐体は、Höller の家をモデルとするものであるが、Höller の家にはモデルとなる建築物が見あたらないということだ。Roithamer は、Höller に、その点について問うが、Höller は記憶にないと答える。すなわち、Höller の家にはモデルとなる建築物はない。それは、建築をめぐる彼の姿勢や行動が、イデーの萌芽を含みながら、なお現実性との接点を有する原因となっている。そして、それ故に Höller やその家族は、Höller の家に実際に住み続けることが可能なのだ。一方 Roithamer の円錐体は、Höller の家をモデルとすることによって、いわゆるメタレベルに達し、現実との接点を失う。イデーにとってはこれは純化を意味する。ここが Höller の家と Roithamer の円錐体の決定的な差異なのだ。この差異がもたらす結果については、Roithamer の妹と円錐体の関係を考察する中で明らかにしていきたい。

2. Roithamer の妹と円錐体

2.1.

Roithamer の円錐体をどう捉えるかという問題においては、円錐体と Roithamer の妹の関係の扱いが一つの大きな鍵であることは間違いない。Roithamer が、円錐体を、「彼の妹のために、Kobernaußer の森の中に」（8）建てたことは、既にテクストの第二文中で記述され、第一部、第二部を通して、円錐体とその建築に関する諸問題が、テクストの圏域から消えることはないからだ。しかし、Roithamer の円錐体にとって、妹の存在がどのように関係しているのか、という問題は、ベルンハルト研究において充分に論じられているとは言い難い。上述したように、Roithamer の妹に対する愛情を、近親相姦的なものと捉える見方に立てば、円錐体は、Roithamer の男根の象徴であり、それを受け入れられないが故に妹は死ぬということになるだろう。この解釈においては、円錐体と妹、そして妹の死と Roithamer の自殺の関係性が明確にされていることは否めない。しかし『訂正』のテクスト全体を、それだけに還元してしまう読みに妥当性があるかどうかは疑問だ。一方で円錐体を、Roithamer による自己実現、あるいは失われた中心の回復の試みとする解釈では、

「妹のため」、「妹の幸福のため」という側面が括弧に入れられてしまう。Altensam の住人である Roithamer の家族の中では、妹は唯一 Roithamer の味方であり、Roithamer と妹は互いに深く理解し合える関係であるとされる。すなわち、Roithamer と妹は同種の人間であり、従って「妹のため」は、Roithamer にとって、「自分のため」と置き換えることが出来るという論理によって、円錐体を Roithamer の自己実現と解釈するということだろう。しかし、これについても論理的な飛躍が見られ、説得力に欠けると言わざるを得ない。円錐体と妹の関係はもう一度問い直す価値がある問題である。

2.2. 円錐体のイデー

『訂正』のテクストの 47 頁以下では、語り手の記述として、Höller の屋根裏部屋に初めて泊まった Roithamer が、夜中にベッドから出て、「初めて書き物机についた瞬間、妹のために、彼女の最高の幸福のために、円錐体を建てるというイデーを持った」（47）と語られる。そして、その夜を徹して Roithamer は、円錐体に関するメモやスケッチをつくり、円錐体の建築場所、大きさ、幅などに関する基本的な構想を固め、その後六年をかけて円錐体を建築したことが記述される。『訂正』の第一部におけるこの記述では、Roithamer が円錐体建築のプラン全体を、彼が Höller の屋根裏部屋で過ごした最初の夜に着想し、基本形をつくり上げたことになっているが、これは前節で言及した、『訂正』の第二部の「Höller と Höller 的なもの、Höller の屋根裏部屋についての記述の試み」（241-253）に描かれる事情とは異なっている。第二部のこの部分では、Roithamer が、Höller の屋根裏部屋に滞在することになった理由として、円錐体建築の計画を練るために Höller と Höller の家を観察する必要があったからだとされている。すなわち、第二部では、Roithamer が屋根裏部屋に泊まった時点で、すでに円錐体建築の計画を持っていたことになる。第一部における語り手の記述は、語り手が Roithamer と共に Höller の屋根裏部屋に滞在したわけではない以上、Roithamer からの伝聞を基にしていると考えられる。従ってこの箇所の矛盾は、語り手に対して Roithamer 自身が、円錐体のイデーを得た場面を劇的に演出した結果生じたものだと解釈することが可能だ。

円錐体と Roithamer の妹の関係性について問う場合、Roithamer がいつどこで円錐体建築のイデーを得たのかということにさほど重要性はない。クリアにしなければならない点は、円錐体に関するイデーが、「妹のために、彼女の最高の幸福のために、円錐体を建築する」というものだということだ。円錐体は、外部構造だけからなる単なるモニュメントではなく、妹が住むための建築物である。すなわち、「彼女の最高の幸福のため」の円錐体というイデーとは、妹が円錐体に住むことによって、最高の幸福を得ることが可能となることを意味内容とすると考えられる。

『訂正』のテクストを受容する者が、まず感じる違和感、あるいは疑問点が、円錐体という建築物の異様から生じるとすれば、次に来る疑問は、「何故妹のためなのか」というものだろう。円錐体のモデルとなった Höller の家は、Höller が自分のために建てたものだ。従って Höller の家自体は、Roithamer の円錐体が、彼の妹のためのものであることのモデルにはならない。単に住居としての円錐体建築であるなら、Roithamer 自身のために建てるというイデーも可能なはずだからだ。円錐体建築には、Roithamer が相続した Altensam の遺産をつぎ込むことによって、Altensam そのものを抹消するという意図も含まれているが、円錐体が妹のためであっても、自分のためであっても、Altensam を抹消するという意図の部分に影響はないであろう。また、Altensam を抹消することによって生じる妹の生活基盤の不安定化を解消することが主眼であるならば、彼

女が、人間らしい生活を送れる場所に土地を購入し、家を建て、相応の財産を残してやれば済むことだ。内部に多くの部屋を持つとはいえ、その中で使用目的が明確なものは瞑想室だけであり、後は水道管が一つ接続され、空調と採光のみが整えられている巨大な円錐体に、しかも、道路が通じてはいるが、周辺に人家もない、40km × 70km もの広さを持つ森の中心部に位置する建築物に住むことが可能だろうか。この問題については、このように客観的現実性に接続させようとする見方では、解答を得ることは出来ないだろう。従って、その象徴性と記号性を問う必要があるが、それに関しては次章で述べたい。

Roithamer の円錐体建築に関するイデーは、彼の妹のため、彼女の最高の幸福のために、Kobernaußer の森の中心部に住居としての円錐体を建てるというものだ。この、「建築物と最高の幸福」という概念の組み合わせを、おそらく Roithamer は、Höller と Höller の家に関する観察から得ている。『訂正』の第一部では、子供時代の一時期を除いて、Altensam における生活において、共に過ごす幸福な時間を持つことが出来なかった Roithamer とその妹が、Höller の家の建築現場で待ち合わせをし、Roithamer は家の建築を手伝い、妹は Höller の子どもたちの面倒を見ることによって真に幸福な時間を過ごしたことが描かれる。おそらくこの妹と過ごした共通の時間が、Roithamer にとっての幸福の原体験となったのだ。そして、Höller の家が完成した後、屋根裏部屋に入り、Höller とその家族、さらに Höller の家自体についての観察を行った Roithamer は、Höller の家の幸福の原因を偏にその建築物と Höller の人格の一致に見出したのだ。これを敷衍すれば、妹を観察し、彼女に完全に一致する建築物を建てることによって、彼女にとって最高の幸福が得られるという結論を得られることになる。目的追求型の性格の典型的人物である Roithamer にとって、自分を含む諸関係の静的な構造的把握には意味はない。彼にとって、自分の存在意義は、「目標」に向けたプロセスの中にあり、「観察」はあくまで目標に向けて自分を動かすための動機として意味を持つ。従って、Roithamer にとって、「自己」は観察の対象とはならないのだ。もし、Roithamer に、自己観察に対する興味があれば、Höller の家に関する幸福のイメージが、Höller とその家族の在り方だけに起因するものではないことが認識出来たであろう。

「妹のため、彼女の最高の幸福のために円錐体を建築する」というイデーは、Roithamer によって、それが思いつかれた瞬間には至高のものであったかも知れない。しかしそれは、常に現実との軋轢にさらされる性質のものだ。Altensam の遺産を建築の費用とする点において、当然それはまず、妹を除く兄弟からの反発を招く。テクスト内では、Roithamer の「発狂」を理由に、彼を禁治産者にしようとする訴訟が兄弟から起こされたことが語られる。また、元々はハプスブルク家の所有であり、現在は国有地である Kobernaußer の森の中心部に、巨大な建築物を建てるという計画は、Roithamer の努力にも拘わらず、完全に秘匿しておける性質のものではなく、世間一般に知られることになる。そのような計画に対する世間の反応は当然「嘲笑」である。しかし、これらの反応は、Roithamer にとって計画の発案時から織込み済みのものであり、彼は、自らの計画と周囲の反応との間に生じる摩擦を逆にエネルギーとして、イデーの実現を目指している。極論すれば、Roithamer にとっては、計画推進のためには摩擦が必要であり、そのために、彼は、意図的に摩擦や軋轢を生む計画を立てているとさえ言えるだろう。

円錐体建築を巡るイデーは、外部との摩擦の他に、イデー自体に深刻な問題を抱えている。それが「妹のため」、「妹の最高の幸福のため」という要素だ。観察によって、妹に完全に一致する建築物を建てれば、そしてその中に妹が住めば、彼女が最高度の幸福を得ることが出来るとい

う想定は、Roithamer だけのものだ。それが現実のものとなるかどうかは、当然のことながら妹の反応次第なのである。テクストでは、Roithamer が円錐体の建築中に何度も妹を建築現場に連れて行こうとしたと記述される。しかし、妹はその都度それを拒否する。Roithamer の計画は、それがまだ実行される前の段階においてさえ、妹からも真剣には扱われない。第二部の中では、建築期間の途中から、Roithamer が、円錐体の完成前に妹に円錐体を見せることを断念したと書かれる。妹が円錐体を受け入れることが出来なければ、妹の幸福のために円錐体を建築するというイデーそのものが成立しないことになり、円錐体の建築そのものが無意味なことになる。このことは、円錐体建築に対する、Roithamer の兄弟や世間一般の反応から生じる摩擦とは異なって、イデーの実現を促すための推進力にはなり得ない。何故なら、それは、イデーそのものを内部から崩壊させてしまうからだ。それ故 Roithamer は、この問題からは目を背け、円錐体の完成を優先させるのである。

ここで問題となるのは、Roithamer が、円錐体完成後に妹がどのように反応するかについて予見していたか否かということだ。Roithamer 自身の遺稿からは、少なくとも『訂正』のテクスト内で再現されている部分からは、この問題に対する直接的言及は見られない。しかし、語り手は、Roithamer が、自然科学者かつリアリストであり、妹の観察によって、「Roithamer が、彼の妹を深く知り、常に繰り返し認識し直したに違いない。その結果、彼が、円錐体の完成とその引き渡しが、妹に与える影響について予見しなかったことは考えられない」(107)と述べる。さらに『訂正』のテクストの末尾に近い箇所に位置し、妹の死後に書かれたと思われる Roithamer の遺稿には、次のような記述が見られる。「ある人物のために建てられた、芸術作品としての建築物は、その人物が死んで初めて完成する」(303)。あるいは、「私は、妹をそこ(Kobernaußer の森の中心部)に連れていき、殺し、同時に円錐体を完成した。(...)というのは、最高の幸福は、ただ死の中にのみ存在するものだからだ」(304)。

これらのテクスト引用部を字句通りに受け取るならば、次のような結論を導き出すことが可能であるかもしれない。すなわち、Roithamer は、円錐体の計画当初から妹の死を織込み済みであり、彼の目的は、あくまで円錐体の完成にあった。また、Roithamer が、妹の死が、円錐体完成のための条件であり、さらに妹は、死ぬことで最高の幸福を手にすることが出来るとも考えていたと。しかしこれはテクスト全体から見た場合、無理な読みであると言わざるを得ない。その理由は複数挙げられる。まず、もし妹の死が、「最高の幸福」という円錐体のイデーに矛盾することなく初めから計画に含まれていたものであり、円錐体が、妹の死をもって完成するものであることも当初の予定通りだとするなら、Roithamer が、妹の死にショックを受け、自殺をする必然性はなくなる。そして、もし Roithamer が、自らのイデーのために妹を死なせるような人間であるなら、彼は、何の複合性も持たない、非常に平板な異常者に過ぎなくなる。また、建築物としての円錐体そのものも、そのような単なる異常者に建てられるような性質のものではないといえるだろう。

「妹のために、彼女の最高の幸福のために、円錐体を建築する」という Roithamer のイデーは、前節で述べたように、円錐体とその建築場所が、Höller の家をモデルとしたメタレベルの構想であったのと同様に、「妹」と「妹の最高の幸福」の要素を加えることによってもメタレベル化する。すなわち、住居としての円錐体というイデーに、「Kobernauser の森の中心部」と「妹の最高の幸福のため」というイデーが複合され、イデーの上に重ねられたイデーになるということだ。その結果、このメタレベルのイデーは、現実との接触点を失うことになる。本来であれば、このような、いわば純化したイデーは、現実化することはあり得ない。それを現実化しようとする方向性が取られ

た瞬間に、すなわち、メタレベルから離されようとする瞬間に、それは壊れてしまう性質のものだからだ。しかし Roithamer は、天才的な才能と超人的な努力をもってイデーを現実化してしまう。このようなイデーは、それが現実と両立することは、本来不可能な性質を持つが故に、イデーが現実化された場合、現実の側が抹消されざるを得ない。それ故、円錐体の完成を見た Roithamer の妹は死ぬのである。すなわち、円錐体というイデーの現実化に、妹の存在というリアルが接触し、その存在が破壊されるのである。

以上本章では、『訂正』における円錐体が、Höller の家をモデルとして着想されながら、Höller や Roithamer の妹という人物、そして Roithamer 自身、さらには語り手という登場人物にも分かちがたく関わっているものであることを示してきた。円錐体は現実化されたイデーである。それは、その本来の性質において、現実との接点を欠いたメタレベルのイデーであり、具体化されるべき性質のものではない。しかし建築物としての円錐体は完成され、その影響力は、円錐体建築に関わった者たちにとって致死的なものとなるのだ。

上述したように、ベルンハルトの作品世界の主人公たちの中で、『訂正』の主人公である Roithamer は、自らが取り組む作品を具体化する唯一の人物だ。その他の主人公たちは、Roithamer と同種の精神的人間としてイデーに関わりながら、それを具体化することを既に諦めているか、あるいは失敗する。では、Roithamer は、ベルンハルトの登場人物としては、この点に関しての例外なのだろうか。確かに、建築物としての円錐体は完成されたとされる。Roithamer の言うところによれば、それは、彼の妹に、外形も内部も完全に一致している。しかし、彼のイデーは、本来は、円錐体によって妹の最高の幸福を達成することであり、円錐体自体の完成ではなかったはずだ。円錐体建築が副次的なものだと述べているわけではなく、元々は、円錐体の実現と妹の幸福は同時に達成されることが要請されていたということだ。しかし Roithamer の妹は、実現された円錐体を見た瞬間に死の病にとりつかれてしまう。すなわち、ベルンハルトの他の主人公たちが持つイデーと同様に、Roithamer のイデーも「妹」という現実と接触した瞬間にその内容としては崩壊するのである。

Ⅲ. 円錐体の象徴性

『訂正』のテクストにおける円錐体は、非常に高度な複合体である。本稿では、前章までにおいて、Höller の家と Roithamer の妹に対する関係に絞って、円錐体について考察を加えてきたが、この考察によって明らかにされた点も、円錐体という複合形象の一面であることは言うまでもない。本章では、まとめとして、円錐体の象徴性、記号性について触れておきたい。

前章で論じたように、円錐体は、Roithamer が着想したメタレベルのイデーである。しかし同時に、建築物としての具体性、円錐体という幾何学的形状による記号性、そして Kobernaußer の森の中心部に位置するという一種の、「場所の象徴性」を有していることも間違いない。さらに、円錐体建築を原因とする、Roithamer の妹の死と Roithamer 自身の死もまた円錐体を巡る複合形象に含まれる。妹の死後、円錐体は、Roithamer によって封鎖され、円錐体建築のために取得した用地も再び国の所有に戻される。円錐体は人の手による管理を受けることなく自然に委ねられ、荒れるがままに放置されるのだ。

本稿の冒頭部で取り上げたように、Roithamer の妹への愛情を近親相姦的なものと捉え、円錐体を男性器のシンボルとして捉える解釈は、テクスト全体の内容にそぐうものではないが、円錐体の象徴性をうまく説明するものではある。本章ではこれに替わる解釈を提出したい。

広大な森の中にある、人目に触れることのない円錐体は、メルヘンの塔に通じる記号性を持って

いる。例えば、グリム童話の『いばら姫』を重ねればイメージとして捉えやすいだろう。妹の死後、森の中に放置され、自然に委ねられるRoithamerの円錐体は、その記号性においては、魔女の呪いをかけられた姫が眠る、いばらに囲まれた塔のアレゴリーと見ることが可能だ。Roithamerと妹は、『ヘンゼルとグレーテル』に登場する兄と妹、そしてRoithamerの母親には、幼い兄妹に辛くあたる継母、あるいは魔女のイメージを重ねることが出来る。もちろんこれは、長編小説としての『訂正』の筋が、何らかのメルヘンの物語と一致している、あるいは類似性があるということではない。あるいは、Roithamerの円錐体に関するイデーに、メルヘンとの関係性が指摘出来るというような性質のものでもない。あくまでも断片的な形象レベルの類似性であって、それを例えるなら、テクストの背景に辛うじて浮かぶシルエットに見られる類似性というようなレベルかも知れない。従って、ベルンハルト研究において、Roithamerの円錐体とメルヘンの塔の類似性を指摘したものはほぼ皆無であり、この類似性は、テクストの詳細な読みによって辛うじて感得され得るものであることは確かだ。

人里離れた森の中の建築物、兄と妹、彼らに対する母親の悪意と憎悪といった形象の他に、『訂正』のテクスト内に、メルヘンとの直接的、間接的つながりを示す箇所は少数ながら存在する。まず、Hölleの屋根裏部屋に滞在することになったRoithamerが、屋根裏部屋で仕事に携わる以外の時間に、Hölleの子供たちと関わることを好み、彼らに自分の創作したメルヘンを好んで話した（114）という点。次に、Roithamerによる、彼の母親の描写、すなわち、彼女が、生まれた時から老けた外見を持っており、常に病弱で、だらしない格好をし、びっこをひきつつ、もぐりの医者から手に入れた怪しげな民間薬の臭いを振りまきながら歩く様子と、メルヘンに登場する魔女の共通性。そして、Roithamerが好む作家として、テクスト内で繰り返し名前を挙げられるノヴァーリスもメルヘンとの関連性を示すものの一つに挙げられる。周知のように、ノヴァーリスは、ドイツの初期ロマン派を代表する詩人であり、ロマン派よってメルヘンの文学的価値が発見されたからだ。グリム兄弟のメルヘンに関する仕事も、この中に含まれるものである。

メルヘンとの共通性を持つこのような形象性は、『訂正』のテクスト内でどのような機能を果たしているのだろうか。ここで再度強調しておきたい点は、物語の破壊者を自認するベルンハルトには、メルヘンとの関連性によって、自らのテクストに「語り」の要素を持ち込むつもりは全くないということだ。あるいはドイツロマン派の特徴である、美化された死を復活させる意図とも無縁だろう。Roithamerの言うように、『訂正』のテクスト内では、死は自らを「訂正」し、消去する手段以外の何物でもない。『訂正』のテクストにおける、象徴性を持つ断片的な形象とメルヘンとのつながりは、ベルンハルトの、故郷に対する愛の現われと解釈することが出来る。これも周知のように、ベルンハルトの文学には、故郷やオーストリアに対する憎しみや反感が溢れている。Roithamerがそうであるように、ベルンハルトも彼の主人公たちも、故郷に対する憎悪の感情を推進力として自らの作品を創造する。しかし、彼らの憎悪は、本来愛情と表裏一体の関係にあるものだ。ベルンハルトにとって現代とは、作家が愛情を原動力としながら物語を紡ぐことの出来る時代ではない。訂正に訂正を重ねることによって、物語性は破壊され、古き良き時代の故郷に対する愛情も一見それと判別不可能なまでに断片化されテクストに散りばめられるのである。『訂正』のテクストの背景に微かに浮かぶメルヘンの塔のシルエットは、顕在化されることは出来ないが、確かに存在する、ベルンハルトの故郷に対する愛の形象なのである。

註

本稿で取り扱うベルンハルトの『訂正』のテクストについては、以下の全集を底本とする。テクストからの引用部の末尾には頁数を記す。邦訳は全て拙訳による。

Thomas Bernhard: Werke in 22 Bänden. Frankfurt am Main 2003ff, Bd.4.

（1）"Die Ursache. Eine Andeutung" Salzburg : Residenz, 1975.
"Der Keller. Eine Entziehung" Salzburg : Residenz, 1976.
"Der Atem. Eine Entscheidung" Salzburg : Residenz, 1978.
"Die Kälte. Eine Isolation" Salzburg : Residenz, 1981.
"Ein Kind" Salzburg und Wien : Residenz, 1982.

（2）Suhrkamp 社から出版されている『全集Ⅳ』の解説に、『訂正』の成立史が詳細に記されている。それによると、ベルンハルトは、『訂正』の前作である『石灰工場』を発表した直後には次作の長編小説のプランを持ち、1971 年 4 月には脱稿したいと考えていたようだ。このプランは実現されず、その後、1972 年の 4 月に出版人の S.Unseld に宛てて次作のタイトルと原稿引き渡しの予定期日、1972 年の 11 月末か 12 月初めを告げている。しかし、この期日は Unseld の催促にも拘わらず再三に渡って延期され、最終的に原稿が渡されたのは、1975 年の 5 月であった。

（3）Ebd.

（4）Vgl., M.Mittermauer: Thomas Bernhard. Suhrkamp Basis Biograohie 11.
Frankfurt am Main 2006,S.90f.

（5）Anne Thill: Die Kunst, die Komik und das Erzählen im Wek Thomas Bernhards.
Würzburg 2011, S.185-189.

（6）Höller の家の外観についてはテクスト内で描写されることはないが、特に例のない形状だとされていないことから、外観については一般的なものだと推測出来る。